

編譯『中國歷史文獻學史述要』 宋代の總集

曾貽芬・崔文印 原著
山口謠司・石川薰・洲脇武志 編譯

宋王朝は、當代と前代の詩文の収集や整理においても大きな成果をあげ、最初に大きな影響力を持つ三部の詩文總集が相次いで出現した。それは『文苑英華』・『唐文粹』・『宋文鑑』である。前の二書は主に唐代の詩文を整理しており、後者は北宋の詩文を整理している。

一、唐代の詩文が最も多い總集―『文苑英華』

『文苑英華』は宋代の四大官修書の一つである。他の三部、『太平御覽』・『太平廣記』・『冊府元龜』はいずれも類書であるが、『文苑英華』のみが詩文總集で、しかも主に唐代の詩文を収録している。『文苑英華』一千卷は、李昉・宋白らが敕を奉じて編纂した。この書は、上は南朝の梁代から下は唐・五代までの二千二百人近い作家の詩文を約二萬篇収録している。これらの詩文のうち、唐代の詩文は全體のほぼ十分の九を占めている。したがって『文苑英華』は蕭統『文選』の後に登場した詩文總集の一つであるが、實際の状況から見ると、唐代の詩文總集であると言っても過言では

ない。

『文苑英華』の編纂は、太宗の太平興國七（九八二）年九月より始まり、携わった主要な人物は、李昉・扈蒙・徐鉉・宋白・賈黃中・呂蒙正・李至・李穆らである。後に李昉らがこの任から異動すると、續けて蘇易簡・王祐・范杲・宋湜らが命じられ、宋白らと共同で完成させて、雍熙三（九八六）年に上奏した。

『文苑英華』は、賦・詩・歌行・雜文・中書制誥・翰林制誥・策問・策・制度・表・箋・狀・檄・露布・彈文・移文・啓・書・疏・序・論・議・連珠・對喻・頌・贊・銘・箴・傳・記・諡哀冊文・諡議・誄・碑・志・墓表・行狀・祭文の三十八類別される。類目は、『文選』のそれと合致しているものがほとんどであるが、改變されたものもある。例えば、中書制誥と翰林制誥の二項目であるが、これは本來的に分類すべき類目ではあるまい。

『文苑英華』は、前代の詩文資料の収集において、以下のような特徴がある。

①詔誥・書判・表疏・碑誌などを比較的多く収録しており、史書の得失を考證する上で役立つ。後人の史書を考證した著作の多くが、その資料を『文苑英華』から多く取っていることからそれは知られよう。例えば、清の徐松『登科記考』はその凡例で「今『舊唐書』『唐會要』『冊府元龜』『文苑英華』『雲麗漫鈔』諸書を以て之を參考す」とはっきりと述べている。『登科記考』を繙くと、そのうちのかんりの資料が『文苑英華』からの引用であることに気が付くだろう。例えば、唐の徳宗の貞元十七年、この年は進士が十八人いるが、その中の李彥方・羅讓・徐至・鄭方・劉積中・杜周士ら六人は、いずれも『文苑英華』から導き出されている。この年の試験問題について、徐松は『文苑英華』の「樂徳教曹子賦」は、「育材訓人之本」を以て韻と爲し、鄭方の賦有れば、是れ此の年の試題なるを知れり」と考證する。それ以外にも、勞格『唐尚書省郎官石柱題名考』・『唐御史臺精舍題名考』、吳廷燮『唐方鎮年表』なども『文苑英華』から資料を取ることが多い。

②宋の周必大は「纂修文苑英華事始」で「是の時印本絶だ少く、韓柳元白の文と雖も尙ほ未だ甚しくは傳はらず。其の他の陳子昂・張說・九齡・李翱等の如きの諸名士の文集は世に尤も見ることに罕なり。修書官は宗元・居易・權德輿・李商隱・顧雲・羅隱の輩に於いては或ひは全卷收入す」と述べている。したがって、『文苑英華』は唐の詩文を補輯する上で特別な價值を持っている。實際に『四庫全書』に収録される七十六人の唐人の文集には、『文苑英華』を補輯に役立てているものがかなりある。例えば、『李義山文集箋注』の提要には『文苑英華』の載する所の諸狀を采摭して之を補ふ……是を今本と爲す」とある。また、陳子昂・劉禹錫・李邕・李華・蕭穎士らの文集について、『文苑英華』が補輯する上で非常に役立っている。

③『文苑英華』は、唐人の文集を校勘する上でかなり高い價值を持っている。その主な理由は、『文苑英華』所收の詩文は、唐人の文集と資料の出典が異なるからである。早くも南宋の時に彭叔夏はこの問題に注目しており、『文苑英華辨證』の中でこうした實例を多數列挙している。例えば、權德輿「李國貞碑」に「人命將法」という一句があるが、『漢書』食貨志の「大命將法」の意味を用いていて、「法」はここでは「覆」の意味であるが、文集では「沈」に作っている、という。また、韓愈「董管行狀」には、彼には「全道・溪・全素・澥」という四人の息子がいると記しているが、文集は「全道・全溪・全素・全澥」に作っている。實は、全道と全素は皇帝から賜った名であり、溪と澥の二人には「全」の字がつかないことをわかっていない、という。清代の勞格や盧文弨などの學者も『文苑英華』を重視して、唐人の文集を校勘している。例えば、『白氏文集』卷四十三に「冷泉亭記」という一文があり、その中に「有相里君造作虛白亭」とある。舊本の文集は、「作」という字が抜け、「造虛白亭」という文になっている。盧文弨は『文苑英華』卷九百八十一に「獨狐及蔡相里造文」有り。造、字は公度、官は河南少尹に至る。且つ此の下皆「作亭」と言へば、宜しく此に獨り「造亭」と言ふべからざる也」と言っている。こうした例證は校勘の分野における『文苑英華』の價值を

十分證明している。

しかし、『文苑英華』には明らかな缺點もある。まず、かなり大部な書物で、多数の者が分擔して編纂し、しかも途中で多くの修書官が變わっているため、その編纂が適當なことは想像に難くない。とりわけ、編纂に携わった者の大部分が文章家であり、決して詩文總集の編纂に優れているわけではなかった。そのため、人口に膾炙した多くの名作、例えば、杜甫の「三吏」・「三別」、李白の「早發白帝城」・「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」・「夢遊天姥吟留別」などが未收録である。このほか、一部の詩文を取り違えている。例えば、沈約「夏白紵歌」を梁の武帝「白紵歌」とし、晉の左思「雜詩」を唐の太宗「遼東山夜臨秋寺」としている。こうした例はまだまだ数多くあり、ここから『文苑英華』の編纂の適當さが窺える。こうした缺點を指摘することは、『文苑英華』を全面的に理解して用いる上で有意義なことである。

『文苑英華』は雍熙三（九八六）年に完成した後、もともとは「李善『文選』と並びに鏤版頒布す」という豫定であった。しかし、原稿が「編次未だ允愜を盡さず」だったため、景德四（一〇〇七）年、「遂に文臣をして前賢の文章を擇び重ねて編録を加へ、補缺を芟繁し、之を換易せしむ。卷數は舊の如し」とした。二年後、つまり眞宗の大中祥符二（一〇〇九）年、さらに太常博士の石待問、そして張耒・薛映・戚綸・陳彭年に再校を命じた。しかし、刊行したかどうかの記載はない。南宋になると「考宗 祕閣本の舛錯多きを以て、周必大に命じて校讎し以て進めしむ。淳熙八（一一八二）年正月二十二日、一百十冊を以て祕閣に藏す」という。現在見る事ができる最も早い『文苑英華』の刊本は、寧宗の嘉泰元（一二〇一）年に刊刻を始め、嘉泰四（一二〇四）年に完成した周必大刊本である。刊行する前に、周必大は特に自分の門下生である胡柯や彭叔夏らに校訂させて誤りを見つけさせ、隨時注記させているので、きわめて閱覽に便利である。『文苑英華』の刊本は、明の嘉靖年間にもう一つ刊本があるだけで、これらが現在目にするのでき

る二つの刊本である。

二、姚鉉と『唐文粹』

『唐文粹』百卷は、吳興の姚鉉が編纂したものである。その自序には「大中祥符紀號四祀、皇帝汾陰后土を祀るの月、吳興の姚鉉『文粹』を集め成る」とある。『宋史』卷八の眞宗本紀三を調べると、大中祥符四（一〇一一）年には、「春正月……丁亥、將に汾陰を祀らんとす。……二月……辛酉、后土地祇を祀る」とある。つまり、『唐文粹』はこの年の初めに完成している。姚鉉は自序で「『文粹』とは何の謂ぞ。唐賢の文章の英粹を纂めし者也」と明言している。では、どのような詩文が「英粹」と呼べるのであろうか。姚鉉は「今世の唐代の類集を傳へし者、詩は則ち『唐詩類選』『英靈間氣』『極玄又玄』等の集有り、賦は則ち『甲賦』『賦選』『桂香』等の集有り。率ね聲律多く、古道に及ぶこと鮮し、蓋し新進後生の名を干め試を求むる者の急用に資するのみ」と述べている（傍線は原著者による）。したがって、文章選擇の基準は「止だ古雅を以て命と爲し、彫篆を以て工と爲さず」であり、詩文は「氣は元化を包み、理は六籍を貫く」ことが必要だと強調し、單なる「侈言曼辭」を輕視している。これは蕭統が述べた「事は沈思より出で、義は翰藻に歸す」という文章選擇基準とは明らかに異なる。蕭統は「辭采を綜輯し」、「文華を錯比」することを強調している。しかし、姚鉉は「古雅」を強調して「古道」を掲げ、「彫篆」は二の次である。はっきり言うなら、姚鉉の文章選擇は、實際の内容の方を重視し、文飾にはあまり注意していない。そのため、「文賦は惟だ古體を取り、而も四六の文は錄さず。詩歌も亦た惟だ古體を取り、而も五七言の近體は錄さず」となった。

『唐文粹』は、古賦・詩・頌・贊・表奏書疏・文・論・議・古文・碑・銘・記・箴・誠銘・書・序・傳・錄記事の十六類

に分かれている。各類の下は更に小類に分かれて、詩文を収録している。つまり「類を以て相ひ従ひ、各おの首第門目に分かつ」¹⁸⁾である。唐代の詩文二千四十二篇を収め、その中で詩は最も多く、九百五十七篇(首)を収録している。巻数からいえば、碑が第一位で、十七卷ある。特に注意すべき點は、『唐文粹』は冊文・檄文・祝壽文などを「文」と稱して一つの類として獨立させ、また、經旨・讀・辨・解などの文章の講讀を「古文」と稱し、一つの類としてしていることである。しかも、前者は四卷のみだが、後者は八巻もあり、「古雅」・「古道」を重視して過度な修飾を輕視するという。『唐文粹』編纂の特徴をよく示している。

編纂者の姚鉉によれば、彼は『唐文粹』の編纂にあたって、「群集を徧閲し、耽玩研究し、掇菁擷華」¹⁹⁾して、十年の間、苦心したという。そして「用意精博にして、世尤も之を重んず」²⁰⁾となった。『唐文粹』の少なくとも以下に示す特徴は注目に値するものである。

①文章選擇の基準が異なるため、『唐文粹』に収録される詩文の中には、『文苑英華』には見えないものがある。例えば、『唐文粹』に収録されている杜甫「石壕史」を『文苑英華』は収録していない。したがって、二書は補完し合うことができ、唐代の詩文を全面的に理解する上で、有意義であることは明らかである。

②詩文の來歴が異なるため、たとえ『文苑英華』に収録されている詩文でも、二書の間には異同があり、校勘の大きな手助けになる。例えば、白居易「元稹志」の中に「六代祖岩、封武平公」とあり、『白居易集』は「昌平」に作っている。宋の彭叔夏は「當に『文粹』の「平昌」に作るに従ふべし。『隋書』本傳及び『唐世系表』に見ゆ」²¹⁾と述べている。また、權德輿「歲星居心贊」は、『文苑英華』収録のものとは同じだが、ただ『文粹』の載する所は百餘字多し²²⁾とある。いずれの事例も、『唐文粹』が校勘において高い價值を持っていることを證明している。

③『唐文粹』は碑・銘を多く収録しており、その史料적價值は言うまでも無く明らかである。

『玉海』卷五十四『祥符唐文粹』條の記載によれば、『唐文粹』は當初は五十卷であったが、後に百卷に増えたという。ただ、この時、編纂者の姚鉉は杭州に在任していたのだが、「知州薛映と協はず。映其の罪狀數條を摭ひ、密かに以て聞す。當に一官を奪ふべきも、特に名を除せられ、連州文學に貶せらる」となり、『唐文粹』の獻上に影響を及ぼしている。『唐文粹』は姚鉉の死後によりやくその息子によって朝廷に獻上され、「詔して内府に藏す」という。

『唐文粹』の編纂は全て個人の力に頼っているため、缺點があっても別におかしくはない。宋人の陳善は「柳子厚の『壽州安豐縣孝門銘』、『壽州刺史臣承思』より而下は、蓋し序也。表を以て序と爲すは、亦た文の一體也。而れども姚鉉編する所の『文粹』は乃ち銘を前に録して、而も題下に于いて註して云ふ、並びに壽州刺史の表、表を銘の後に録して、以て附見すと。此れ鉉の陋也」と述べている。宋人の王得臣も、『文粹』が『張登文集』を収録していないため、「是に由り姚も亦た未だ見ざる者有るを知る」と述べている。こうした指摘は、姚鉉の「陋」を当てこすっており、過激な部分もあるが、確かに事實に即している。『四庫全書總目提要』は「惟だ文中韓愈の『平淮西碑』を芟りて、仍ほ段文昌の作を録するは、未だ心有りて異を立つるを免かれず」と指摘しているが、必ずしもそうではない。『舊唐書』韓愈傳によると「元和十二年八月、宰臣裴度 淮西宣慰處置使・兼彰義軍節度使と爲り、愈を行軍司馬と爲すを請ひ、仍りて金紫を賜ふ。淮蔡平らぎ、十二月度に隨ひて朝に還り、功を以て刑部侍郎を授かり、仍りて愈に詔して『平淮西碑』を撰せしむるに、其の辭は裴度の事を敘すること多し。時に先に蔡州に入りて吳元濟を擒ふるは李愬にして、功第一なり。愬之を不平とす。愬の妻は禁中に出入し、因りて碑辭の實ならざるを訴へ、詔して愈の文を磨かしめ、憲宗翰林學士段文昌に命じて重ねて文を撰し石に勒せしむ」とある。韓愈が撰した『平淮西碑』は削られ、最終的に朝廷に立てられた『平淮西碑』は、段文昌が撰したものであることは明らかである。しかし、文章について言えば、韓愈の方が段文昌よりはるかに優れており、これは蘇軾「臨江驛」詩が「淮西の功業 吾が唐に冠たり、吏部の文章 日月の光。

千載碑を斷つも人膽炙す、知らず世に段文昌有るを」と述べる通りである。しかし、段文昌の文章は結局最後に石に彫られたものであり、姚鉉が碑類で段文昌の文章を用いたのは、實狀に即したもので、決して新機軸を打ち出したのではない。もちろん、韓愈と段文昌の両者が撰した碑文を共に収録していたら、さらによかったであろう。

『四庫全書總目提要』は、『唐文粹』について「唐の文を論ずる者は終に是の書を以て總匯と爲す。一二の小疵を以て其の全美を掩はざる也」と評價している。我々はこれは公平かつ實狀と一致しているものだと考える。

三、呂祖謙と『宋文鑑』

『宋文鑑』百五十卷及び目錄四卷は、南宋の學者である呂祖謙が敕を奉じて編纂した北宋の詩文の總集である。當代の人が當代の詩文を編纂したもので、一代の歴史文獻を保存しているという點で重要な意義をもっている。

呂祖謙が『宋文鑑』を編纂する以前、「臨安の書坊に所謂『聖宋文海』なる者有り、近歲江鈿の編する所」というものがあった。淳熙四（一一七七）年、孝宗は臨安府に『聖宋文海』を「校正刻板」するよう命じ、「呂祖謙に委ね精加校證に專一せしむ」という。呂祖謙は『文海』は元書坊の一時の刊行に係り、去取は未だ精らかならず、名賢の高文大冊は尙ほ遺落多し」と考え、「一に増損に就きては、仍ほ斷つこと中興以前の銓次よりし、以て遠を行ふべきを庶幾ふ」と申し出た。朝廷はその建議を受け入れ、呂祖謙は『聖宋文海』を基盤にして、改めて編次を行った。これが『宋文鑑』である。

『宋文鑑』は、古賦・詩騷・奏疏・碑志・行狀・露布など六十一門に分かれている。こうした門類のうち、賦・律賦・詩・五古・七古・五律・七律・五絶・七絶・雜體・騷體の十一門は、わずか三十卷分で、全體の五分の一にすぎない。

どうやら詩賦など文學作品は、『宋文鑑』収録作品の重要な點ではないようである。逆に奏疏門は二十二卷を占めてい
る。『宋文鑑』の文章選擇は、大部分は「治道」に關する文獻に偏っていると云えよう。

陳振孫によれば、『宋文鑑』が上奏された後、「近臣密啓して云ふ、其の取る所の詩は、田里の疾苦を言ふこと多し、
乃ち舊作を借りて以て今を刺す。又た載する所の章疏は、皆な祖宗の過擧を指し、尤も宜しき所に非ず」といふ。今、
これについて考察してみると、確かに「田里の疾苦」を述べた詩は少なくない。例えば、卷十四に樂府歌行十四首があり、
その中の張耒「勞歌」には「天工作民良久難、誰知不如牛馬福」とあり、「負重民」の苦勞は牛馬以上であると明言してい
る。また、許彥國「秋雨嘆」には「田家麥穗未暇悲、茅屋且爲螢火飛」とあつて、農家が長い旱魃に苦しむ様を述べてい
る。晁補之「豆葉黃」には「腰鎌獨健婦、大男往何許。官家散弓刀、要汝殺賊去」とあり、田畫の「築長堤」にも「南隣
里正豪且強、白紙大字來呼追……要與官長修長堤……」とあり、また當時の農村の天災や人災について特に言及してい
る。このような篇章はこの卷に収録されている樂府の七分の二を占め、その比率は確かに少なくない。

『宋文鑑』の文章選擇の基準について、周必大は『宋文鑑』の序で「古賦詩騷は、則ち文を主として譎諫なるを欲し、
典冊詔誥は、則ち溫厚にして體有るを欲し、奏疏・表章は、其の諒直にして忠愛なる者を取り、箴銘・贊頌は、其の精
懇にして詳明なる者を取り、以て碑記・論序・書啓・雜著に至りては、大率事辭の稱せらるる者を先と爲し、事の辭に勝
るは則ち之に次ぎ、文質備はるる者を先と爲し、質の文に勝るは則ち之に次ぐ。復た謂ふに律賦・經義は、國家取士の源
にして、亦た加へて采擿し、略ば一代の制を存す」と述べている。ただし、周必大は『宋文鑑』の具體的な編纂に携わつ
ておらず、こうした基準は、周必大自身の想像にすぎないのかもしれない。南宋の著名な學者である朱熹は、自分の學
生に『宋文鑑』の文章選擇の五例を説明している。残念ながら「已に一例を」⁽¹⁾っているので（「已」二例）、朱熹は四例
のみを説明した。それは、①正に其の文理の佳きを編する者有り。②其の文且つ此の如く、衆人以て佳と爲す者有り。

③其の文甚だしくは佳からざると雖も、而れども其の人の賢名微にして、其の泯没するを恐れ、亦た其の一二篇を編する者有り。④文佳からざると雖も、而れども理取るべき者有り³⁶⁾である。これを見ると、文章選擇の基準は決して一定しておらず、文章自體によって選ばれたものもあれば、作者によって選ばれたものもあつたことがわかる。良いとは言えない文章でも、みなが良いと思えば、世俗に従つて選ばれている。これは文章の評判によって選ばれたと言える。『玉海』卷五十四によれば、呂祖謙は「國初は文人尙ほ少く、故に取る所は稍寬し。仁宗以後、文士輩出し、故に取る所は稍嚴し³⁷⁾」と述べている。ここから、呂祖謙は文章を選ぶ際、融通を利かせて基準を運用しているため、自分の文章選擇の意圖をしっかりと體現できていることがわかる。

『宋文鑑』は當代の詩文を収録しているが、かなりデリケートな問題が多いため、『宋文鑑』に對する評價は一定していない。朱熹を例として論じてみると、朱熹はかつて「伯恭『文鑑』に去取の文、某平時の看ること熟せざる者の若きは、也た敢て斷たざる也。數般有りて皆な某熟讀するの底、今揀び得て也た巴鼻無し。詩の好き底の如きは、都て上面に在らず、却つて那の袁颯底を載す。把て好句法を作るも、又た好句法無く、把て好意思を作るも、又た好意思無く、把て勸戒を作るも、又た勸戒無し³⁸⁾」と述べている。彼は「東萊『文鑑』編し得ること泛なるも、然れども亦た近代の文を見得す。沈存中『律曆』一篇の如きは、渾天を説きて亦た好し³⁹⁾」とも述べてもいるが、基本的には否定的態度をとっていることは明らかである。しかし、朱熹は晩年になると「此の書の編次、篇篇に意有り。每卷首必ず一大文字を取り、壓卷を作る。賦の『五鳳樓』を取るが如きの類なり。其の載する所の奏議も、亦た一時の政治の大節に繋繋り、祖宗二百年規模と後來中變の意と、盡く其の中に在りて、『選』『粹』の比に非ざる也⁴⁰⁾」と述べている。どうやら朱熹は長い時間を経て冷靜になり、ついに客觀的な評價を下せるようになったようである。それと同時に呂祖謙が編纂した『宋文鑑』も時代の審査に耐え、北宋の「二百年規模と後來中變の意」をよく示す、かなり優れた總集であることを證明した。

呂祖謙の言によれば、ちょうど清書し終えたとき、彼は「末疾」、つまり中風にかかったため、『宋文鑑』をさらに完備させるための条件を失し、しかも朝廷から頻繁に催促されたために、快復を待ってから修訂・献上することが不可能になった。

『宋文鑑』は献上された後でからひどく批判を受けたため、朝廷は崔敦詩（字は大雅）に命じて削除・訂正させた。奏議の部分は修正がかなり多かったと言われている。朱熹によれば「蜀人の呂陶に一文有りて師服を制するを論ずるが如きは、此の意甚だ佳し。呂止だ此の一篇を收む。崔云ふ、陶の多少の好文、何ぞ獨り此のみを收むるか。遂に之を去りて、更に他文を參入す」という。しかし、『四庫全書總目提要』が指摘する通り、「此の本六十一卷中、仍ほ此の篇有れば、則ち敦詩の改本に非ざること確かならん」である。時が経つにつれ、呂祖謙が編纂した初本が認められ、他者による改訂本を批判するようになったことがわかる。これらは呂祖謙が編纂した『宋文鑑』の生命力を十分に説明している。

呂祖謙は『宋文鑑』を編纂する際に、宋朝の「三館四庫の藏する所」を活用し、しかも「縉紳故家の録する所」も探求して、取得した文集は全部で八百家であったという。これは宋代の歴史文獻を保存する上で極めて大きな役割を果たしている。特に詩文の収集が比較的早くに行われたために、文章の誤りが比較的少なくなり、誰の目にも明らかな校勘上の價值を有することとなった。

以上のことから、宋代は前代の文獻の収集においても、現存する文獻の保存においても、かなりの業績を残しており、歴史文獻學史において突出した時代であることは言うまでもないことがわかる。

- (1) 今以『舊唐書』『唐會要』『冊府元龜』『文苑英華』『雲麗漫鈔』諸書參考之。
- (2) 『登科考記』卷十五『文苑英華』『樂德教胄子賦』，以「育材訓人之本」爲韻，有鄭方賦，知是此年試題。
- (3) 『文苑英華』卷首「是時印本絕少，雖韓柳元白之文尙未甚傳。其他如陳子昂·張說·九齡·李翱等諸名士文集世尤罕見。修書官於宗元·居易·權德輿·李商隱·顧雲·羅隱輩或全卷收入」。
- (4) 『四庫全書總目提要』卷百五十一采摭『文苑英華』所載諸狀補之，又補入「重陽亭銘」一篇，是爲今本。
- (5) 『文苑英華辨證』卷一「權德輿『李國貞碑』，人命將法。漢食貨志，大命將法，法方勇反，覆也。而文集作沈」。
- (6) 『文苑英華辨證』卷二「韓愈『董晉行狀』四子全道·溪·全素·澗。集本或作『全道·全溪·全素·全澗』按世系表及愈所作董溪墓誌，溪·澗並無全字。蓋全道·全素皆上所賜名也」。
- (7) 盧文昭『群書補集』白氏文集『文苑英華』卷九百八十一有獨狐及祭相里造文，造字公度，官至河南少尹。且此下皆言「作亭」，不宜此獨言「造亭」也。
- (8) 『玉海』卷五十四「與李善『文選』竝鑄版頒布」。
- (9) 『玉海』卷五十四「編次未盡允愜」，「逐令文臣擇前賢文章重加編錄，芟繁補缺，換易之。卷數如舊」。
- (10) 『玉海』卷五十四「考宗以祕閣本多舛錯，命周必大校讎以進。淳熙八年正月二十二日，以一百十冊藏祕閣」。
- (11) 大中祥符紀號四祀，皇帝祀汾陰後土之月，吳興姚鉉集『文粹』成。
- (12) 春正月……丁亥，將祀汾陰。……二月……辛酉，祀後后土地祇。
- (13) 『文粹』謂何。纂唐賢文章之英粹者也。
- (14) 『唐文粹』序「今世傳唐代之類集者，詩則有『唐詩類選』『英靈閒氣』『極玄又玄』等集，賦則有『甲賦』『賦選』『桂香』等集。率多聲律，鮮及古道，蓋資新進後生干名求試者之急用爾」。
- (15) 『唐文粹』序「止以古雅爲命，不以彫篆爲工，故修言曼辭皆不取」，「氣包元化，理貫六籍」。
- (16) 『文選』序「事出于沈思，義歸乎翰藻」，「綜輯辭采」，「錯比文華」。
- (17) 『四庫全書總目提要』卷百八十六「文賦惟取古體，而四六之文不錄。詩歌亦惟取古體，而五七言近體不錄」。
- (18) 『唐文粹』序「以類相從，各分首第門目」。
- (19) 『唐文粹』序「徧閱群集，耽玩研究，掇菁擷華」。
- (20) 施昌言「唐文粹寶元二年刻本後序」「用意精博，世尤重之」。

- (21) 『文苑英華辨證』卷三「當從『文粹』作『平昌』。見『隋書』本傳及『唐世系表』」。
- (22) 『文苑英華辨證』卷七「『文粹』所載多百餘字」。
- (23) 『直齋書錄解題』卷十五「與知州薛映不協。映披其罪狀數條，密以聞。當奪一官，特除名，貶連州文學」。
- (24) 『四庫全書總目提要』卷百八十六「詔藏內府」。
- (25) 『捫蝨新話』卷六「柳子厚壽州安豐縣孝門銘，自「壽州刺史臣承思」而下，蓋序也。以表爲序，亦文之一體也。而姚鉉所編『文粹』乃錄銘于前，而于題下注云，并壽州刺史表，錄表于銘後，以附見焉。此鉉之陋也」。
- (26) 『塵史』卷中「由是知姚亦有未見者」。
- (27) 『四庫全書總目提要』卷百八十六「惟文中苒韓愈『平淮西碑』，而仍錄段文昌作，未免有心立異」。
- (28) 元和十二年八月，宰臣裴度爲淮西宣慰處置使，兼彰義軍節度使，請愈爲行軍司馬，仍賜金紫。淮蔡平，十二月隨度還朝，以功授刑部侍郎，仍詔愈撰「平淮西碑」，其辭多敘裴度事。時先入蔡州擒吳元濟李愬，功第一。愬不平之。愬妻出入禁中，因訴碑辭不實，詔令愈文，憲宗命翰林學士段文昌重撰文勒石。
- (29) 淮西功業冠吾唐，吏部文章日月光。千載斷碑人膽炙，不知世有段文昌。
- (30) 『四庫全書總目提要』卷百八十六「論唐文者終以是書爲總匯。不以二一小疵掩其全美也」。
- (31) 『建炎以來朝野雜記』乙集卷五「臨安書坊有所謂『聖宋文海』者，近歲江鈿所編。孝宗得之，命本府、校正刻板」。
- (32) 呂祖謙「奉聖旨銓次劄子」，「委呂祖謙專一精加校證」。
- (33) 呂祖謙「奉聖旨銓次劄子」，「『文海』元係書坊一時刊行，去取未精，名賢高文大冊尚多遺落」，「一就增損，仍斷自中興以前銓次，庶幾可以行遠」。
- (34) 『直齋書錄解題』卷十五「近臣密啓，云其所取之詩，多言田里疾苦，乃借舊作以刺今。又所載章疏，皆指祖宗過舉，尤非所宜」。
- (35) 古賦詩騷，則欲主文而譏諫，典冊詔誥，則欲溫厚而有體，奏疏・表章，取其諒直而忠愛者，箴銘・贊頌，取其精懇而詳明者，以至碑記・論序・書啓・雜著，大率事辭稱者爲先，事勝辭則次之，文質備者爲先，質勝文則次之。復謂律賦・經義，國家取士之源，亦加采掇，略存一代之制。
- (36) 『朱子語類』卷百二十一「有正編其文理之佳者。有其文且如此，而衆人以爲佳者。有其文雖不甚佳，而其人賢名微，恐其泯沒，亦編其一二篇者。有文雖不佳，而理可取者」。
- (37) 國初文人尚少，故所取稍寬。仁宗以後，文士輩出，故所取稍嚴。

(38) 『朱子語類』卷百二十一「伯恭『文鑑』去取之文、若某平時看不熟者、也不敢斷也。有數般皆某熟讀底、今揀得也無巴鼻。如詩好底、都不在上面、却載那衰颯底。把作好句法、又無好句法、把作好意思、又無好意思、把作勸戒、又無勸戒」。

(39) 『朱子語類』卷百二十一「東萊『文鑑』編得泛、然亦見得近代之文。如沈存中『律曆』一篇、說渾天亦好」。

(40) 『直齋書錄解題』卷十五「此書編次、篇篇有意。每卷首必取一大文字作壓卷。如賦取『五鳳樓』之類。其所載奏議、亦繫一時政治大節、祖宗二百年規模與後來中變之意、盡在其中、非『選』『粹』比也」。

(41) 『朱子語類』卷百二十一「如蜀人呂陶有一文論制師服、此意甚佳、呂止收此一篇。崔云、陶多少好文、何獨收此。遂去之、更參入他文」。

(42) 『四庫全書總目提要』卷百八十六「此本六十一卷中、仍有此篇、則非敦詩改本確矣」。

(43) 周必大『宋文鑑』序「三館四庫之所藏」、「縉紳故家之所錄」。

(44) 『玉海』卷五十四「所得文集凡八百家」。

(捕注)

『文苑英華』明隆慶元(一五六七)年刊本のテキストは甚だ劣るといふことは、既に太田次男、神鷹徳治の『白氏文集』の研究によっても明らかにされている。また南宋刊本は、現存百卷分程しか満たないが、南宋刊本を明代に精寫したものが國立公文書館内閣文庫、又臺灣故宮博物院等に所藏される。これらの寫本は南宋刊本の缺を補うもので資料的にも價值が高い。公刊を強く望むものである。